

序 特集 コロナ禍の海外研修・フィールドワークによせて

児玉香菜子

本特集は2020年から2022年までコロナ禍¹において実施した海外研修とフィールドワークの報告である。筆者らが執筆にあたり参考にしたのが、東日本大震災の際に偶然東北大学に出張中に被災し被災地から千葉に帰郷するまでの経緯の詳細な記録である(千葉大・教授・男2012)²。これはとうしんろく編(2012)に収録されているもので、この本は東北大学の教員、学生はもとより、大学生協、業者、訪問者など、多くの人たちから聞き取った震災体験を記録出版したものである。もちろん同列に扱うことはできないが、「当事者³」としての体験を記録するという位置づけを本特集ではとることにした。というのも、筆者らはコロナ禍を中心テーマとして海外研修、フィールドワークをしたわけではないからである。2020年から新型コロナウイルス感染症(COVID-19、以下新型コロナ)が世界をパンデミックに陥れ、多くの国が水際対策として海外からの受け入れを大きく制限した。そのため、当初予定していた海外研修およびフィールドワークは新型コロナの拡大にともない大きな変更を余儀なくされ、筆者らはそうしたなかでなんとか海外渡航を敢行した。よって、綿密な取材によるルポには到底およばないことを改めて強調しておきたい⁴。それでも、あえてこうした特集をくみ、自分たちの経験を記録公開しようと考えたのは、コロナ禍において海外渡航が制度的にかつ経済的に難しい時に海外渡航し、滞在した筆者らの記録が何かしら今後コロナ禍を理解する際に役に立つであろうと考えたからである⁵。そのため、制度だけでなく、経済的なことや感じたことなどをできるだけ記述するよう努めた。

本特集は、日本から中国への長期滞在、中国での短期のフィールドワーク、中国から日本への渡航

¹ 本特集でコロナ禍という表現を用いるのは、「新型コロナとかウイルスとか感染とか発症とか、本気で説明しようとすれば多くの文字数を使わなければならない微妙なニュアンスを、たったひとつの「禍」という文字で一括変換のように表すことができるから」である(森2020:317-318)。これはメディアでコロナ禍という表現が用いられる背景として説明したものであるが、本特集でも同様である。

² 他に本特集の執筆者らを中心に浜田明範らによる編著『新型コロナウイルス感染症と人類学—パンデミックとともに考える』を講読した(浜田ほか2021)。個人的に参考にしたのが森達也編『定点観測新型コロナウイルスと私たちの社会』論創社シリーズで、半年を一区切りとして、2020年前半から2022年前半まで計5冊出版されている(森編2020;2021a;2021b;2022a;2022b)。当時は振り返るにあたり、またコロナ禍を多角的に考察する際に大変参考になるものである。

³ パンデミックの顕著な特徴はすべての人間が当事者性を持つことである(浜田ほか2021:12)。

⁴ たとえば、都市封鎖直前の武漢を自ら訪問、その後の経過を詳細に伝える共同通信社特派員早川によるドキュメント(2020)、コロナ禍の日本における移民の生活を伝えてくれるルポ(室橋2021)、齋藤(2022)も詳細に紹介している山岡淳一郎による日本の医療ドキュメント(2021)。また、コロナ禍の2020年のアメリカを車で横断する、貧困問題のルポ(マハリッジ2021)などがある。

⁵ コロナ禍における記録の重要性は文学の世界でも指摘されている(齋藤2021:111-112)。

と日本からアメリカへの渡航の報告からなる。報告は計6本で、そのうち5本が中国のゼロコロナ政策下で実施されたものである(図1)。

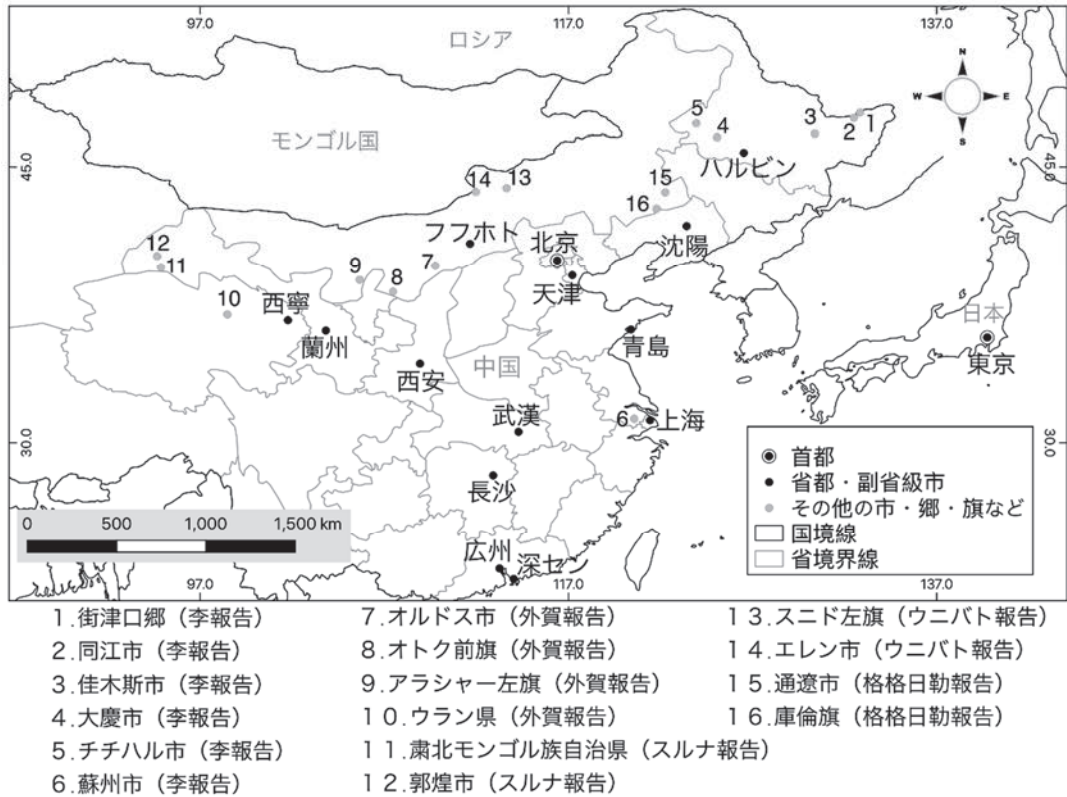


図1 本特集における中国の訪問滞在都市位置図(ウニバト作成)

まず、李による「中国ゼロコロナ政策下の海外研修及びフィールドワーク」で、中国での長期滞在の記録である。李は千葉大学大学院で博士号を取得した後、成蹊大学に就職している。李の専門は言語学で、ヘージェン語を研究対象としている。李はサバティカルによる海外研修で2021年8月から2年間中国へ家族とともに渡航し、2022年12月現在も滞在中である。ゼロコロナ政策によって厳しく国内移動制限をしている中国において、黒龍江省でフィールドワークを敢行している。中国のゼロコロナ政策、省をまたぐ移動制限とその困難、フィールドワークの様子に加え、コロナ禍における人びとの生活の変化も伝えるものである。

次の報告は中国内モンゴルに長期滞在している外賀による報告「中国ゼロコロナ政策下における中国内モンゴルでの長期滞在—フフホト市のロックダウンを経て—」である。外賀は京都大学大学院出身で、2020年に開催したモンゴル研究会に参加しており、そこで知己を得ていた。外賀の専門は言語学で、モンゴル語を研究対象としている。フィールドワークのため、2019年から中国内モンゴル自治

区フフホト市にある内モンゴル大学に留学していた。しかし、新型コロナ発生による中国の急激な感染対策の強化により、2020年2月に急きよ日本への帰国を余儀なくされた。その後、翌年2021年4月に内モンゴル大学外国語学院日本語系の講師として就労ビザで内モンゴルへ再度渡航した。これは留学ビザでは中国へ行くことができなかつたためである。外賀の報告、とりわけ2022年後半における厳しいロックダウンとそれによる社会的な混乱と日常生活への影響についての描写は実に壮絶で、その苦勞がしのばれる。正直、筆者は2022年10月時点で調査研究を中断して日本へ帰国された方がよいのではないかと思うほどであった。しかし、外賀は博士論文執筆に必要な調査研究のため、引き続き在留を決意されていた。その後、11月下旬に上海をはじめとする中国のロックダウン政策に対するデモが日本でも報道されたが⁶、なぜ若者が怒つたのか、その背景を知るうえで重要な報告になるろう。

次に、フィールドワークのために2020年12月から翌年2021年4月まで中国へ渡航したスルナによる報告「中国ゼロコロナ政策下におけるフィールドワーク—甘肅省の牧畜地域へ—」と、同じくフィールドワークのために2021年1月から3月まで約2ヶ月中国へ渡航したウニバトによる報告「中国ゼロコロナ政策による集中隔离—内モンゴルへ—」である。両者ともに少なくとも2週間の強制的なホテルでの隔離生活を強いられている。とりわけ、ウニバトは経由地での隔離に加え、目的地でも7日間のホテルでの隔離生活を送っている。これら経費はすべて自己負担で、2人は院生であることもあり、経済的な負担が大きい。また、2021年前半は、中国の大都市と比較して、中国の牧畜地域は比較的のんびりした様子であったことを教えてくれる。その後、オンラインによる聞き取り調査により、2022年12月までの現地の一変した様子も報告している。

次いで、中国から日本への渡航で、2022年6月からフィールドワークのために来日した格格日勒による報告「コロナ禍における日中の大学生生活と新型コロナ対策」である。格格日勒の報告は大きく2部構成で、まず来日前後のコロナ禍にある内モンゴル、フフホト市での大学生生活についてである。ここでもSNSで得た来日後から2022年12月までのフフホト市と大学の様子を報告している。次いで、日本のコロナ対策についてである。格格日勒の研究テーマは日本の介護制度で、実際に介護施設でアルバイトをしており、日本の大学と介護施設における感染対策を外国人の視点から報告している。

最後に、筆者による2020年10月から2021年3月までの家族でのアメリカでの海外研修についての報告「コロナ禍のアメリカ渡航」である。2020年10月当時、アメリカは海外からの受け入れに対して隔離もなく、PCR検査証明も必要ではなかつた。ただし、ビザが必要で、2020年3月に取得していたため、実現した海外研修であった。主に生活面について報告している⁷。

⁶ 「中国、デモ呼びかけ急拡散 「マラソン大会 白い紙持参 リツイート希望」」『朝日新聞』2022年11月30日朝刊, 1面。

⁷ 他にアメリカでサバティカル中にコロナ禍に遭遇した日本人研究者の報告に三嶋(2021)がある。

本特集に寄せられた報告を読んであらためて思うのは、「生活のすべてが病気によって全面的に塗りつくされているわけではない」（浜田ほか2021：12）ということである。ただ、本特集の外賀にあるように中国のゼロコロナ政策の徹底ぶりはまさにコロナ対策で生活のすべてを全面的に塗りつくそうというものであった。しかし、中国はゼロコロナ政策を放棄した（李、外賀、格格日勤報告）。ここまでしても感染を抑えることができなかったということはオミクロン株の感染力がそれだけすさまじいということである。中国のゼロコロナ政策は新型コロナに敗れたともいえる。こうしたなかで、コロナ禍は国家の在り方を浮かび上がらせると同時に（ユニバト報告）、人びとの生活と意識を大きく変えている（李、外賀報告）。コロナ禍による社会と生活の変化については今後の課題である。

最後に、過密なスケジュールにもかかわらず、それぞれの体験を詳細にまとめたくれた特集の執筆者のみなさんに感謝の意を表します。

引用文献

斎藤美奈子（2021）「コロナと五輪と戦争アナロジー」森達也編『定点観測新型コロナウイルスと私たちの社会 2021 年前半』論創社，99-112.

斎藤美奈子（2022）「「戦場」を追うノンフィクション、「日常」を描くフィクション」森達也編『定点観測新型コロナウイルスと私たちの社会 2021 年後半』論創社，93-108.

千葉大・教授・男（2012）「試験監督の仕事ができないことを詫げる電話を入れようと思った」とうしんろく（東北大学震災体験記録プロジェクト）編，高倉浩樹・木村敏明監修『聞き書き震災体験：東北大学 90 人が語る 3.11.』新泉社，287-299.

とうしんろく（東北大学震災体験記録プロジェクト）編，高倉浩樹・木村敏明監修（2012）『聞き書き震災体験：東北大学 90 人が語る 3.11.』新泉社.

浜田明範・西真如・近藤祉秋・吉田真理子（2021）「はじめに」浜田明範・西真如・近藤祉秋・吉田真理子編『新型コロナウイルス感染症と人類学：パンデミックとともに考える』水声社，7-21.

浜田明範・西真如・近藤祉秋・吉田真理子編（2021）『新型コロナウイルス感染症と人類学：パンデミックとともに考える』水声社.

早川実（2020）『ドキュメント武漢 新型コロナウイルス 封鎖都市で何が起きていたのか』平凡社
マハリッジ，デール 上京恵訳（2021）『コロナ禍のアメリカに行く：ピュリツァー賞作家が見た繁栄から取り残された人々の物語』原書房.

三嶋恒平（2021）「コロナ禍前後のアメリカでのサバティカル」『商工金融』71-10:36-39.

森達也（2020）「禍福は糾える縄の如し」森達也編『定点観測新型コロナウイルスと私たちの社会 2020 年前半』論創社，315-330.

森達也編（2020）『定点観測新型コロナウイルスと私たちの社会 2020 年前半』論創社.

- (2021a) 『定点観測新型コロナウイルスと私たちの社会 2020 年後半』 論創社.
- (2021b) 『定点観測新型コロナウイルスと私たちの社会 2021 年前半』 論創社.
- (2022a) 『定点観測新型コロナウイルスと私たちの社会 2021 年後半』 論創社.
- (2022n) 『定点観測新型コロナウイルスと私たちの社会 2022 年後半』 論創社.
- 室橋裕和 (2021) 『ルポ コロナ禍の移民たち』 明石書店.
- 山岡淳一郎 (2021) 『コロナ戦記 医療現場と政治700日』 岩波書店.

(こだま かなこ・千葉大学人文科学研究院)

Overseas study and fieldwork during the COVID-19 pandemic: An Introduction to the special issue

KODAMA Kanako

The purpose of this special issue is to record and report our experiences of overseas study and fieldwork conducted during the COVID-19 pandemic in 2020-2022. Due to COVID-19, many countries had significantly restricted people from abroad, and overseas travel became systematically and economically difficult. As a result, the authors were forced to make significant changes in their planned initial overseas study and fieldwork. Nevertheless, we traveled overseas for extended stays and conducted fieldwork. We hope that these reports will help with understanding the challenges of researching abroad during the COVID-19 pandemic. Therefore, we have tried to describe as much as possible the control policies related to COVID-19, the economic situation, and our feelings.

This special issue consists of six reports.

First, "Overseas study and fieldwork during the COVID-19 pandemic in China" by Linjing Li is a report of her long-term stay in China. Her major is in linguistics, with a focus on the Hezhen language. Professor Li and her family went to China for two years, from August 2021, on a sabbatical, and she is still there as of December 2022. The report describes the 'Zero-COVID' policy in China, her fieldwork, and the changes in people's lives due to the pandemic.

The following report is "Long-term stay in Inner Mongolia, China, under China's 'Zero-COVID' policy: Lockdown experience in Hohhot City" by Aoi Geka. Her major is also in linguistics, with a focus on the Mongolian language. For fieldwork, as part of her PhD candidature, she was studying at Inner Mongolia University in Hohhot, Inner Mongolia, China, from 2019. However, the COVID-19 outbreak and strong measures against COVID-19 in China forced her to return to Japan in February 2020. The following year, in April 2021, she went to Inner Mongolia again on a work visa as a Japanese language teacher at Inner Mongolia University and stayed until August 2023 because student visas were not distributed from China at the time. The report by Ms. Geka, especially her description of the severe lockdown in the second half of 2022 and the resulting social turmoil and its impact on daily life, depicts a truly challenging experience.

The next two reports are about conducting fieldwork in China. One is "Fieldwork experience under China's Zero-COVID Policy: From Japan to a pastoral area in Gansu province" by Suerna, a graduate student who traveled from Japan to China for fieldwork from December 2020 to April

2021. The other is "Forced quarantine under China's Zero-COVID Policy: Heading to Inner Mongolia from Japan" by Unibat, a PhD candidate who also traveled from Japan to China for about two months from January to March 2021. Both Suerna and Unibat were forced to stay in a hotel as part of mandatory quarantine for at least two weeks. All of these expenses were self-funded, and the fact that they were both graduate students convey the financial burden. They also tell us that in the first half of 2021, the attitudes of those in pastoral areas of China were relatively laid-back compared to those in the big cities of China. Then, through online interviews, these two reports record the drastic change in the local situation in China in Autumn and Winter 2022.

Next is the report "University life and countermeasures in China and Japan during the COVID-19 pandemic" by Gegerile, a PhD candidate who came from China to Japan for fieldwork in June 2022. This report covers university life and countermeasures in Hohhot, Inner Mongolia, and Japan.

Finally, in "Overseas study in the U.S. during the COVID-19 pandemic in 2020-2021", I report on my family's overseas travel to the U.S. from October 2020 to March 2021. In October 2020, there was no quarantine, and PCR test certification was not required for those who traveled to the U.S. from abroad. Without the visa to enter the U.S., which I obtained in March 2020, this overseas study would have been impossible. The report mainly focuses on life experiences.

These reports teach us that the COVID-19 pandemic does not entirely paint everything in life. However, as noted by Ms. Geka in this special issue, the thoroughness of China's Zero-COVID policy was an attempt to entirely paint all aspects of life. However, China eventually abandoned its Zero-COVID policy. COVID-19 has brought to light the nation's state and, at the same time, has drastically changed people's lives and consciousness. The detailed changes in society and people's lives due to the COVID-19 pandemic will be the subject of a future theme.